

Minami Kyushu University Syllabus							
シラバス年度	2021	開講キャンパス	都城キャンパス	開設学科	環境園芸学部	実務経験 教員担当	アクティブ ラーニング
科目名称 [英語名称]	韓国語コミュニケーション I [Korean Communication I]			実務経験 教員担当		アクティブ ラーニング	○
科目コード	750155	授業形態	講義	単位数	2	配当学年	2年次
教員氏名	章 大寧			学位授与の方針 との関連			
授業概要	<p>この講義の目的は、韓国語の会話能力を身につけるとともに、韓国語学習を通して韓国の歴史や文化に触れ日韓理解の向上に役立て、豊かな人間性・社会性・国際性を育てることにある。</p> <p>韓国は日本に最も近い外国である。日本と地理的に近いだけでなく、歴史・文化において共通点も多い。韓国語は、日本語との共通点があり、日本人にとって最も覚えやすい外国語であるといえる。しかし、韓国語学習を始めてみて、中々覚えられない、上達できないという声が多い。韓国語習得が難しいという原因の一つは、韓国語を表記している文字(ハングル)を十分に理解していないことにある。このことは、韓国の文字ハングルを理解することが韓国語上達の鍵になることを意味している。</p> <p>韓国語コミュニケーション I は、初めての受講生でもハングルを十分に理解し、文字の読み書きを完全習得することを目標とする。</p>						
関連する科目	韓国語コミュニケーション II、英語コミュニケーション I・II						
授業の進め方と方法	<p>講義進行はテキストに即して進める。受講生一人一人の理解と習得状況を確認しながら繰り返し練習する。宿題による自己学習と予習・復習を徹底する。韓国の文化や歴史に関心を持ち、日韓理解の向上と国際性の涵養に努める。</p>						
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義紹介</li> <li>2 韓国語と日本語の共通点 (テキスト、基礎・第1課、p6-7)</li> <li>3 ハングルの思想と原理 (テキスト、基礎・第1課、p8-9)</li> <li>4 基本母音 (テキスト、基礎・第2課、p10-13)</li> <li>5 基本子音 (テキスト、基礎・第3課、p14-19)</li> <li>6 合成母音 (テキスト、基礎・第4課、p20-23)</li> <li>7 合成子音・終声・バッチム (テキスト、第5課、p24-29)</li> <li>8 発音の変化(テキスト、基礎・第6課、p30-34)</li> <li>9 挨拶 (テキスト、基礎・第7課、p35-39)</li> <li>10 自己紹介(テキスト、第1課、p40-45)</li> <li>11 です・ですか (テキスト、第2課、p46-51)</li> <li>12 否定 (テキスト、第3課、p52-57)</li> <li>13 存在 (テキスト、第4課、p58-63)</li> <li>14 する動詞(テキスト、第5課、p64-69)</li> <li>15 総合復習</li> </ol>						
授業の到達目標	<p>ハングルの思想と原理を理解し、子音母音の組み合わせ方、発音方法、読み書きを習得する。</p> <p>韓国語の基本表現・基礎単語を習得し、読み書きができる。</p> <p>学習成果を生かして、積極的・主体的なコミュニケーション行動が取れる。</p>						
授業時間外の学修	<p>講義内容・テキストに沿って予習と復習を徹底する。</p> <p>講義中に出された宿題について調査し、レポートを提出する。</p> <p>日韓の歴史・文化に関心を持って、情報を収集し、知識を深める。</p>						
課題に対する フィードバック	宿題やレポート提出等は、事前・事後とも十分に説明し、受講生との意思疎通を図る。疑問・質問には受講生が納得するまで丁寧に対応する。	評価方法		文字の理解度・読み書き 50%  文章の理解度・基本表現 50%			
テキスト	木内明「基礎から学ぶ韓国語講座」、初級、改訂版、CD付き、国書刊行会。						
参考書	木内明「基礎から学ぶ韓国語講座」、中級、改訂版、CD付き、国書刊行会。  ハン・コーウン「絵で見る韓国語」、IBCパブリッシング株式会社。  白峰子、大井秀明訳「韓国語文法辞典」、三修社。  尹亭仁「身につく韓日・日韓辞典」、三省堂。  民衆書林編集局「NEWポータブル日韓・韓日辞典」、三修社。						
備考	韓国語講義は、前期 I と後期 II は別々ではなく通年講義として計画し、1年間で完成するようになっている。したがって I・II の順番に通年受講することが望ましい。II の受講は I 合格者に限る。後期だけの受講、または後期からの受講は原則的に認めない。受講状況によってキャンパスごとに合併授業をすることがある。						